

NIKKEI
NBUNKO
日経文庫

中国を知る

〈第2版〉

巨大経済の読み解き方

遊川和郎



遊川 和郎 (ゆかわ・かずお)

1959年広島県生まれ。東京外国語大学中国語科卒。
1981～83年上海復旦大学留学。(株)日立製作所、外務省専門調査員（在香港総領事館）、(株)日興リサーチセンター上海駐在員事務所長等を経て、1998年より北海道大学言語文化部助教授。2001～2003年外務省専門調査員（在中国大使館）。2007年4月より北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授。

著書に『強欲社会主義 中国全球化の功罪』（小学館）、『華人経済ネットワーク』（実業之日本社、共著）、『現代中国を知るための50章』（明石書店、共編著）など。

日経文庫1232

中国を知る

2007年3月15日 1版1刷

2011年1月25日 2版1刷

著 者 遊 川 和 郎

発行者 羽 土 力

発行所 日本経済新聞出版社

<http://www.nikkeibook.com/>

東京都千代田区大手町1-3-7 郵便番号100-8066

電話 (03) 3270-0251(代)

印刷 東光整版印刷・製本 大進堂

© Kazuo Yukawa, 2007

ISBN 978-4-532-11232-5

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

NIKKEI
NB UNKO
日経文庫

中国を知る

第2版

巨大経済の読み解き方

遊川和郎

蔵書章

日本経済新聞出版社

はじめに

二〇〇七年三月に本書の初版を刊行してから四年近くが経ちました。この四年弱の間に、国際情勢やビジネスをめぐる環境が大きく変化したことを読者の皆さんも感じておられるでしょう。真っ先に〇八年秋の米国発金融危機（リーマン・ショック）を思い浮かべますが、これを機に米欧先進国から中国をはじめとする新興国へのパワーシフトが進行しています。〇九年には米国でオバマ大統領が就任、日本は自民党から民主党への政権交代が起きました。

こうした国際情勢の変化によつて中国を見る世界の目線も変わっていますし、中国自身の変化の速さと大きさに注意が必要なのは言うまでもありません。本書では改訂にあたり、特に以下の三点に留意しました。

一つは国際社会における中国の影響力、存在感の高まりです。二〇一〇年には日本を抜いて世界第二の経済大国となることが確実視されていますが、単に経済規模だけではありません。輸出額、新車販売台数、米国債保有高、ネット人口、CO₂排出量など様々な領域で中国が世界一に躍り出ており、中国が世界経済に与える影響力はすでに臨界点を超えた感があります。さらにリーマン・ショック以降、G20首脳会議が世界経済の重要課題を解決する枠組みとなつ

たように、中国をはじめとする新興国の台頭と欧米先進国の地盤沈下で国際社会の力関係は大きく変わりました。地球上のあらゆる問題に対して中国の動向、影響を無視できなくなり、中国・新興国を抜きにした問題の解決は不可能になったと言つてよいでしょう。

二つ目は日本企業にとって中国がビジネスの主戦場となつていく現実を直視することです。かつての低コスト生産を目的とした製造拠点としてではなく、過去数年の間に日本を代表する自動車産業など多くの業種で中国・新興国での販売比重が格段に高まりました。建設機械をはじめ、中国事業が稼ぎ頭となる例も今や特別なことではありません。東京株式市場では、中国関連銘柄と呼ばれ中国の景気動向に業績が大きく左右される企業も幅広い業種に及んでいます。内需型と言われる小売り、外食等のサービス業も、国内市場の縮小から中国での事業展開拡大に乗り出しました。日本国内でも中国人観光客による春節商戦が話題になったように、豊かになった中国人をターゲットとしたビジネスが救世主のように期待を集めています。中国向けネット通販への出店も含め、現地に直接乗り込まなくともお客さまは中国人です。巨大市場を隣に持つのは日本企業にとって大きなアドバンテージでもあるわけです。

三つ目は、中国自身の変化を構造的にとらえることです。北京五輪、上海万博といった国家イベントの開催、チベットやウイグルでの少数民族騒乱、格差など社会矛盾の拡大・蓄積、共産党の後継体制、揺れる米中・日中関係、人民元、食品安全問題、続発するストライキ、中国

資本による日本企業買収等々メディアで大々的に取り上げられるニュースは枚挙にいとまがありません。一見目まぐるしく変化したように見えても実態は何も変わっていないこともよくあります。「不易」と「流行」の部分をきちんと整理し、地殻変動が生じている部分は正確に察知するといった深い次元での理解が求められます。

中国に関する情報が錯綜して混乱を起こす原因には、変化の速さや地域差、また「上に政策あれば下に対策あり」のような融通無碍、そして西側の常識を超えた落差と多様性などがあります。銀座で高級ブランドをまとめ買いする中国人も、一生農村で貧しい生活を送る中国人もそれぞれ無視できない数で存在しています。「平均値」は現実には存在しない像を語っていることもしばしばです。

本書では一つ一つの事象や問題をデータで説明するとともに、「データで語られない部分」もそれ以上に重視しています。海外でビジネスをする際、各種のデータや経済指標は当然頭に入れるでしょう。しかし、単なるデータや事象の比較があまり大きな意味を持たないこともビジネスパーソンは経験的に感じているはずです。

「データで語られない部分」を知るには、表面的な事象ではなく、その国の社会構造や人々の意識、あるいは発展段階を踏まえて考える必要があります。グローバル化が進む中で、それ

ぞれの社会固有の制度や慣習は奇異に映るかもしれませんが、その地においては一定の合理性があるものです。それを理解することがビジネスの基本のように思います。

ところが、歴史や文化に根ざした習慣、社会の構造、人々の考え方や行動様式というのは、その国の人にはあまりにも当たり前すぎて、きちんと説明してくれる本はなかなかありません。また発展段階に伴う意識の変化もその国ではあまり意識されていないものです。「そこにいる人、わかっている人は何も言わない」、このような人々の間の暗黙の合意やその国を覆っている空気、これがくせ者です。

ただ、これが「中国（人）は……」という切り口になると、どうも本質を外した議論に陥りがちです。本書では、あるがままの中国を受け入れながら、その「きちんと説明されていない部分」を解き明かし、ビジネスの参考になるよう心がけました。「突然の辞令」で中国と関わり合うことになった人はもちろん、中国ビジネスの真っ只中にいる人にも、錯綜する情報を交通整理してあらためて中国を考える視点を提供できればと願っています。類書は山ほどありますが、違いを感じていただければ大きな喜びです。

二〇一〇年二月

遊川 和郎

中国を知る——「目次」

「I」世界経済の主役に躍り出た中国——15

1——一線を越えた存在感——15

- (1) 世界を動かす中国経済——15
- (2) 多極化とG2——16
- (3) 中国からあふれ出るヒト、モノ、マネー——18
- (4) 世界を駆けめぐる中国マネー——20

2——二〇〇〇年代の中国——21

- (1) 高成長の牽引役は旺盛な投資——21
- (2) WTO加盟——22
- (3) 突然のマイカーブーム——23
- (4) 庶民の意識を変えた住宅改革——25
- (5) 車、住宅、携帯が変えた中国社会——27
- (6) 大型連休の創設——28
- (7) 消費の担い手——29

3——拡大する日本企業の中国ビジネス——31

- (1) 高まる中国事業の重要性——31
- (2) 市場を求めて地方都市へ——33
- (3) 訪日観光客の購買力——36
- (4) 日中経済関係も双方向に——38

「Ⅱ」改革開放政策を検証する

41

1—改革開放の歩みと成果——42

- (1) 「いいところ取り」からのスタート——42
- (2) やる気を引き出す改革の成功——43
- (3) やる気だけの改革の限界——44
- (4) 市場経済化の最重点・国有企業——46
- (5) 国有企業改革に伴うリストラ——47

2—開放政策の展開——49

- (1) 局地開放から全国展開へ——49
- (2) 「早い者勝ち」からビッグネーム優先へ——51
- (3) 地域誘導から産業誘導へ——52
- (4) 内陸地域への傾斜——54
- (5) 総合改革モデル区と地域振興——55
- (6) 沿海と内陸の差——56
- (7) 「走出去」戦略——57

3—共産主義社会の変容——60

- (1) 「単位」社会の溶解——60
- (2) 成長期と成熟期の混在——61
- (3) スーパー誕生の背景——63
- (4) ITがもたらした監視社会の風穴——64

「Ⅲ」改革の痛みと副作用

69

1—改革が生んだ社会の歪み——70

- (1) 地域間の格差——70
- (2) 都市と農村の構造格差——72
- (3) 三農問題——75
- (4) 急拡大する都市内部の格差——76

2 国有企業改革の顛末——77

- (1) 国有企業改革のどさくさ——77
- (2) 民営企業の躍進とハンデ——78
- (3) 「国進民退」批判——80
- (4) 寡占業種の高賃金——81
- (5) 住宅改革による資産格差——82
- (6) 機能しない税を通じた再分配——83

3—改革の失敗が問うもの——85

- (1) 改革の失敗と軌道修正——85
- (2) 低下する改革への信任——87
- (3) 脆い中産——88

4—世代間の不公平——90

- (1) 受益者になれない世代——90
- (2) 「勝ち組世代」と「負け組世代」——91
- (3) 「八〇后」の運命——91
- (4) 都会の底辺生活者という現実——93

[Ⅳ] 中国の政治体制を知る

95

1—鄧小平時代の統治構造——95

- (1) 党内序列と国家組織——95
- (2) 長老の影響力——96
- (3) 保守派と改革派——98
- (4) 胡耀邦・趙紫陽の失脚——99
- (5) 鄧小平の引退と第三世代——100
- (6) 地方と中央の人事——101

2—登用と退出のメカニズム——102

- (1) 朱鎔基の抜擢——102
- (2) 上海閥・上海グループ——104
- (3) 花形営業マンの時代——106
- (4) 不採算部門の建て直し——107
- (5) 終身権力の終焉と世代交代——108
- (6) 共青团と太子党——110
- (7) 中国共産党はボーイングコンサーン——112

3—共産党一党支配の矛盾——113

- (1) 共産党の掌の中——113
- (2) 成長こそが求心力——114
- (3) スローガン政治——115
- (4) 腐敗の蔓延——116
- (5) 民は統治されるもの——118
- (6) 一党体制下の議会——119
- (7) 反対勢力への神経質な対応——121

〔V〕持続的成長の懸念材料

123

1―軟着陸を模索する人口問題―123

- (1) 一人っ子政策の成果―123
- (2) 一人っ子政策の副作用―125
- (3) 消失する「人口ボーナス」―126

2―環境と資源の制約―128

- (1) 巨大な人口負荷―128
- (2) 排出大国―129
- (3) 数値目標導入―130

3―核心技術の欠如―132

- (1) 借り物の技術―132
- (2) 出口の見えない技術開発―134
- (3) ニセモノが横行する風土―135
- (4) 高度化する知財侵害―136
- (5) 長期戦への対応と加害者リスク―137
- (6) 「自主创新」―138

4―人民元問題と米中関係―141

- (1) M F N更新と米中摩擦―141
- (2) 日本発の人民元問題―142
- (3) 小幅切り上げと管理フロート制移行―144
- (4) 人民元弾力化―145
- (5) 中国にとっての人民元問題―146
- (6) 国益に沿った改革―148
- (7) 人民元の国際化―149
- (8) 米中戦略経済対話―150

「V」中国ビジネスの現場

153

1 外資政策の変遷 153

(1) 「三資企業」設立からM&Aへ 153 (2) ITICの破綻と地方の債務 155

(3) 外資政策の見直し 157 (4) 民族ブランド保護 158 (5) 外資の有効利用 159

2 中国事業のリスク 161

(1) 進出の適否から事業運営上のリスクへ 161 (2) 民族感情リスク 162

(3) 中国に依存するリスク 164

3 雇用をめぐる環境の変化 166

(1) 「民工荒」の発生 166 (2) 急激な賃金上昇 168 (3) 「労働契約法」施行 169

(4) 頻発し始めた労働争議 170

4 経営の現地化と人材 172

(1) グローバル人材 172 (2) 求める人材と役割の明確化 173 (3) 「空手形」の限界 174

(4) 評価とやりがい 176 (5) 現地トップの国際化 177 (6) 本社とのコミュニケーション 178

〔Ⅶ〕中国人の考え方を知る——181

1—コネとメンツ——182

(1) 信頼できるものは何か——182 (2) なぜコネ社会なのか——183 (3) 組織よりも人——184

(4) 「遠慮」は無用——185 (5) 中国人のメンツ——187

2—日本人の勘違い——189

(1) 「系列」と「背景」——189 (2) 正直者がバカを見る——190 (3) ガラス張りの効能——192

(4) 泣き寝入りしないために——193 (5) 「自粛」のない社会——194

3—ビジネスに対する考え方——195

(1) 「和」よりも「利」——195 (2) 中国人的合理性——196 (3) ビジネスは運命共同体——197

(4) お座敷と円卓——198

〔Ⅷ〕中国との共生を模索する——201

1—中国への期待と懸念——201

(1) 「北京コンセンサス」——201 (2) 転機となったCOP15——202 (3) 中国責任論への反論——203

(4) 「核心的利益」——204 (5) 「鳥の巣世代」——206 (6) 百年遅れてやって来た大国——207

2—中国の行動原則——209

- (1) 「内政不干渉」——209
- (2) 「発展する権利」——210
- (3) 「責任ある大国」——211
- (4) 普遍的な大義を——212
- (5) 中国への過剰な期待——213
- (6) 良好な秩序形成に協調を——214
- (7) ルールは自分が作るもの——216

3—共生への覚悟——217

- (1) なぜ八%成長は必要か——217
- (2) 体制維持の桎梏——219
- (3) 情報統制の限界——220
- (4) 全知全能の神の苦悩——222
- (5) 集団指導体制の脆弱さ——222
- (6) 次の一〇年で起きる変化——224
- (7) 共生のビジョンと覚悟を——225

「I」 世界経済の主役に躍り出た中国

I 一線を越えた存在感

(1) 世界を動かす中国経済

二〇一〇年第2四半期、中国の国内総生産（GDP）名目値が初めて日本を上回りました。一〇年通年でも、中国が日本に代わって「世界第二の経済大国」となることが確実視されています。ただこれはGDP規模の話で、「世界経済の成長に対する寄与」という側面から見れば、中国の寄与率は〇七年に二七%（IMFサーベイ、一〇年一月）と、すでに米国を抜いて最大の牽引役です。〇八年の米国発金融危機で先進国経済が大きな打撃を受けてそこから抜け出せないでいるのに対し、中国はいち早く景気を回復軌道に乗せ、世界経済は中国を中心とする新